［論　文］

高校生の携帯メール依存に対人関係が与える影響[*1]

The Effects of Interpersonal Relationships on Text Message Dependency among Japanese High School Students.

西　村　洋　一[*2]　遠　藤　健　治[*3]

Abstract

This study investigated how text-message dependency related to the interpersonal relationships of adolescents. Interpersonal factors adopted were: the perception of parental control; the attachment to parents; the feelings toward friends and the behavioral criteria of the peer group. Data were collected from Japanese high school students (n=618) who actively used cell-phones. Analysis in this study used structural equation modeling by each gender. The results showed that the negative feelings toward friends and the behavioral criteria of the peer group had positive relevance to multiple factors in text-message dependency. In general, text-message dependency was more strongly related to friendship factors than parental factors, and discussion about that point was made.

キーワード：携帯メール依存／行動基準／友人に対する感情／親によるネット統制

問題

携帯メール利用に対する懸念：携帯メール依存

近年、携帯電話は若年層への普及が著しいが、若年層による携帯電話利用に対しては、保護者は多くの懸念を示している。具体的な懸念として、携帯電話の過剰な利用（時間的な面や料金面を含む）や友人関係におけるトラブル、または利用実態が保護者から見にくいという点などが挙げられる。携帯電話によるメール利用（以下、携帯メールと呼ぶ）に絞ってみれば、携帯メールの過剰な利用やそこから対面コミュニケーションの不足が起きることに対する懸念が考えられる。特にデジタル・ネイティブとも呼ばれる現代の若年層は携帯電話をほぼ１日中手放すことがなく、継続した利用を行っている現状があるが（橋元・奥津・長尾・庄野，2010）、そのような様を保護者がみた場合一層懸念を強めることは想像に難くない。

１日当たりのメール利用数についての調査は複数存在する。例えば文部科学省（2009）によれば、中学生や高校生において、１日当たり10件未満（30％ほど）が一番多いものの50件以上が中学生で20％ほど、高校生で15％弱である。これら数字は保護者世代と比べるとその多さが鮮明となる（80％以上が10件未満）。この数の多さが携帯メール依存と直結しているというわけではないが、携帯メール依存というものへの懸念を高める一つの要因となっているであろう。

実際のところ、「携帯メール」への依存という概念は規定が難しい。携帯メールのようなメディアへの依存として、「インターネット依存」という言葉が取り上げられることが多いが、この概念に対しても多くの批判が存在し、議論がなされている(Morahan-Martin, 2007; Yellowlees & Marks, 2007)。携帯メール依存についても概念規定の難しさは同様である。例えば、先に挙げたようなメールのやりとりの数といった量的な面は一つの指標とはなりうるが、本来「依存」という症状を示すにはより多様な側面が含まれなければならない。携帯メール依存の概念も、それ自体が多様な症状を含む固有の精神疾患として存在するのではなく、精神的、身体的、行動的問題へとつながる心理的、行動的過程としてとらえた方がより望ましい。それにより概念規定における問題に対応し、実証的な検討に取り上げることが可能になると思われる。

これらを踏まえ、Igarashi, Motoyoshi, Takai, & Yoshida (2008)では、携帯メール依存を"ネガティブな社会的結果につながる心理的、行動的症状を引き起こす強迫的行動と関連するメールのやり取り(text-messaging)"と定義している。この定義に基づき、Igarashi et al. (2008)では、吉田・高井・元吉・五十嵐（2005）において作成された携帯メール依存尺度を用いて過度の携帯メール利用から心理的・行動的症状につながるプロセスを検討している。この携帯メール依存尺度は因子分析結果により「情動的な反応」（携帯メール利用に伴う情動の変化や敏感な反応)、「脱対人コミュニケーション」（携帯メールを対面コミュニケーションの補完、代替として利用する)、「過剰な利用」（衝動的な利用を含む携帯メールな過度な利用の認知）の３つの因子が抽出されている。そしてこれらの３つの側面すべてが携帯メール利用から生じる心理的・行動的症状と正の関連があることを示した。

ここで興味深いのは、携帯メール利用によって生じる症状へとつながる2つのルートが示されたことである。Igarashi et al.（2008）はパーソナリティ要因として外向性と神経症傾向を取り上げ上記のモデルに含めた検討を行っているが、そこで見出された１つのルートは、外向性が過剰な利用と高い正の関連を示し、それが心理的・行動的症状へとつながるという「外向的メール依存」である。これは外向性の高さゆえに他者とのかかわりが活発であり、携帯メールを過剰に利用した結果心理的・行動的症状が引き起こされ、日常生活に支障がでるものであると考えられている。そしてもう１つのルートは「神経症的メール依存」であり、神経症傾向が脱対人コミュニケーションや情動的な反応を促進し、心理的・行動的症状へつながるというものである。

ケータイメール依存と関わる心理的要因

Igarashi et al.（2008）以外にも、ケータイメール依存と関わる要因はいくつかの研究で検討がなされている。竹内・金山（2010）は中学生を対象に、１日の携帯メールの送受信数をもとにした依存度とライフスタイルやストレス反応との関連を検討している。その結果、全般に携帯電話依存群はライフスタイルが良くなく（例えば、"朝食を毎朝食べない"、"就寝時間は遅い"、"勉強に自信がない"など)、ストレス反応も高いことを示した。

携帯メール依存に含まれる携帯メール利用の衝動性との関連の検討としては西村・遠藤（2010）がある。西村・遠藤（2010）は自己制御と携帯メール依存との関連を検討した。衝動性はメディアに対する依存の関連要因として取り上げられることが多いが、携帯電話利用への依存についても衝動性と正の関連があることが示されている（Billieux, Van der Linden, d'Acremont, & Zermatten, 2007)。その衝動性に対しては、高い自己制御能力が抑制の作用を示すと考えられる。自己制御についてエフォートフル・コントロールという概念を用いて検討した結果、「注意の制御」と「行動抑制の制御」は携帯メール依存に負の関連を示した。すなわち、携帯メール利用において衝動的な不適切な利用を抑制し、メールのやりとりにおいて生じたネガティブな感情に対して注意を底から切り離し、気晴らしができるということにより、携帯メール依存全般を抑制するよう作用すると考えられる。

親子関係との関連

上述の研究は利用者個人のライフスタイルやパーソナリティを扱ったものであるが、携帯メールがコミュニケーション・ツールであることを考えると、利用者の対人関係的な側面を取り上げ、検討を行うことでさらなる知見が得られると思われる。対人関係的な側面としては比較的に親密な他者とのかかわりが携帯メール依存と強く関わると予測される。なぜなら、携帯メールはPCメールなどと異なり親密な他者との間に頻繁にやり取りされ

＊1 本研究は「2010年度　北陸学院大学および北陸学院大学短期大学部共同研究費」より助成を受けた。ここに記して謝意を表する。
＊2 NISHIMURA, Youichi
北陸学院大学　人間総合学部　社会学科
社会心理学
＊3 ENDO, Kenji
青山学院大学　教育人間科学部　心理学科

るものだからである。実際、携帯メールの相手をみてみると、主に自分から距離の近い人に使われる（宮田・ボーズ・ウェルマン・池田, 2006）。具体的に挙げると保護者（特に母親）や自分と同じ学校に所属する友人などが多い。小学生では保護者（母親）とのメールのやりとりが多いが、中学生以上になると保護者とのやりとりから友人とのやりとりの方が多くなる。ただし、その段階になっても女子は男子よりも保護者・家族とのメールのやり取りが多い傾向がみられる（モバイル社会研究所, 2009; 文部科学省, 2009; 日本PTA全国協議会, 2012）。さらに、携帯メールを使う若者は、携帯メールにより友人との結びつきが強くなったと自覚し（例えば、小林・天野・正高, 2007; NTTドコモ モバイル社会研究所, 2010）、研究結果からも携帯メールの利用が友人や家族といった親密な他者との関係を強めることが示されている（Igarashi, Takai, & Yoshida, 2005; 小林・池田, 2005）。

これらの携帯メールの利用状況を踏まえ、本研究では利用者の対人関係と携帯メール依存とのかかわりについての検討を行う。特に、親子関係と友人関係に着目する。親に関する要因としては、親との情緒的結びつきとして愛着、そして保護者によるインターネット利用への統制を取り上げる。親との関係が若者のメディア利用とどのようにかかわるのかという点については、携帯メール依存自体ではないが、インターネット依存やインターネット上でのいじめ・攻撃などとの関係が検討されている。Liu, Fang, Deng, & Zhang（2012）において、親子のコミュニケーションが開放的で問題が少ないことが病理的なインターネット利用との間に負の関連を示した。また、戸部・竹内・堀田（2010）は児童生徒と心理・社会的要因とインターネット依存傾向との間の関連を検討する中で、インターネット依存傾向の高い生徒は「親には何でも話せる」という質問にそう思わないという方向の回答が多いことを示した。安藤（2009）はネット上でのいじめの加害者・被害者両方を経験した中学生はそのような経験のない群に比べて保護者の関心が低いという結果を得ている。また、インターネット上での攻撃行動（ハラスメント）を行った若者は保護者との情緒的親密感が不足と関連があるという知見もある（Ybarra & Mitchell, 2004）。これらの先行研究より、親への愛着が安定的であることは携帯メール依存と負の関連を示すことが予測される。

保護者によるインターネット利用への統制は、インターネット利用やインターネット依存との間に負の関連を示すことが明らかにされている。例えば、インターネット使用（Eメールやチャットなど）と親によるインターネット利用の監視との間には負の関連があり（Sun, Unger, Palmer, Gallaher, Chou, Baezconde-Garbanati, Sussman, & Johnson, 2005）、利用する内容についてのルール作りや過剰な利用への反応、インターネット利用に関するコミュニケーションの質は問題のあるインターネット利用との間に負の関連がみられた。

特にインターネット利用についてのコミュニケーションの質は縦断的な分析においても問題のあるインターネット利用に負の影響を示していた（Van den Eijnden, Spijkerman, Vermulst, Rooij, & Engels, 2010）。これらの知見からすると親による子のインターネット利用への統制は携帯メール依存にも負の関連を示すことが予測される。ただし、一方で日本の若年層のインターネット利用状況をみると、親にあまりインターネット利用について話をしていないという割合が多く（文部科学省, 2009）、利用時間帯や利用内容についてなどのルールは半数程度が設けているものの、利用時間についてのルールはあまりもうけられていない（日本PTA全国協議会, 2012）という現状があり、日本においては親による統制の効果が限定的な可能性も存在する。また、親から子への統制という文脈においては、この行動を追跡したり監視したりする行為もあれば、親子のコミュニケーションを通した子供の行動の把握という側面もあり、どちらが問題行動と関連するかは議論されているところである。そこで、本研究では統制の実践と把握という両側面を測定する尺度と用いた上で、携帯メール依存とどのような関連がみられるか検討する。

友人関係との関連

友人との関係は青年にとって重要な位置づけにあり、携帯メールの相手としても大きな部分を占めていることを考えると、友人との関係のありよう、その認知が携帯メール依存と関連していることが予測される。インターネット依存を抱える青年は対人関係にも問題がみられるという知見もあり（Milani, Osualdella, & Di Blasio, 2005）、携帯メール依存との関係を予見させる知見であると思われる。本研究において、友人関係についてはその関係において抱える感情と行動基準としての仲間集団という２側面を取り上げる。友人関係において抱える感情については、ネガティブな感情を強く抱えている場合に、携帯メール依存の各要素、特に脱対人コミュニケーションや情動的な反応と高い関連がみられることが予測される。戸部・竹内・堀田（2010）においてはインターネット依存傾向の高い生徒は「何でも話せる友だちがいる」という問いに対して、そう思わないという方向の回答が多かった。また、西村・遠藤（2010）においても男子のみではあるが対人疎外感における圧迫拘束感という感情が携帯メール依存と関連することが示されている。また、仁尾・石田・内海（2009）は友人関係において「不安・懸念」や「葛藤」といった感情との間に弱い、あるいは中程度の関連をみいだしている。これらの知見は上述の予測を支持するものである。そこで、本研究でも仁尾他（2009）の用いた友人に対する感情的側面尺度用いて再度携帯メール依存との関連を検討する。さらに、仁尾他（2009）では結果として報告されていない「信頼・安定」の感情も分析に取り上げる。Igarashi et al.（2008）においては外向的メール依存というルートが見いだされたが、友人との関係において信頼・安定といった感情を強く持つことは携帯メール依存の「過剰な利用」と正の関連を示すことが考えられるため、その関連について検討を行う。

本研究で取り上げるもう１つの側面は、行動基準としての仲間集団である。行動基準は菅原・永房・佐々木・藤澤・薊（2006）により、「個人が自らの行動を制御する場合、重視する目標や手がかり」として定義され、また、行動規範とは異なり道徳的価値は必ずしも含まないものであるとされている。菅原他（2006）は５つの行動基準を想定しているが、その中で行動基準としての仲間集団（菅原他（2006）では「仲間的セケン」とされているが、本研究では「仲間集団」と記す）は例えば「友達みんながやっていることに乗り遅れたくない」など仲間集団への同調を基本とした行動パタンを生み出す基準として考えられている。仲間集団を行動基準として重視する心理の背景には、中高生においては友人関係における集団規範が重視され、仲間からの同調圧力が強くなり、グループから外されることに対する不安の存在が考えられる。例えば、佐藤（1995）は女子高生がグループに所属する理由として、「浮いた存在になることの忌避」因子の存在を見出している。また、女子中高生や男子高校生は他の年代よりも拒否不安が強い（杉浦, 2000）。仲間集団への同調性の高さは仲間との密着性を高めるなどポジティブな面もあるが、負の側面の存在も考えられるであろう。携帯メール依存との関連もその負の一面として存在するかもしれない。携帯メール利用においても一定の時間内に返却をしないと友人関係が無くなるといったようなルールが若者の間で存在していると指摘されることがある（例えば、モバイル社会研究所, 2009）。実際にそのようなルールが若者において存在するか否かは別にして、このような指摘は友人のような仲間を自分の行動の基準として重視することが携帯メール依存に関連することを示唆するものであるとも考えられる。すなわち、仲間集団の行動基準と携帯メール依存は正の関連がみられることが予測される。

本研究の目的

これまで述べてきたように、携帯メールの性質を考慮すると、若者の携帯メール依存について、その対人関係の側面から検討を行うことは価値があると考えられる。特に親密な関係である親子関係、友人関係を取り上げ、親に関する変数である、親への愛着、親によるネット統制、そして友人に関する変数である、行動基準としての仲間的セケン、友人に対する感情的側面といった変数と携帯メール依存との関連について検討を行う。

方法

調査対象

15歳から18歳の高校生（高専生）男女618名に対し調査を実施した。調査の実施はインターネット調査会社に委託したため、そのモニターが対象

となった。618名の中で携帯電話を不所持、不使用の回答者を除いたため、分析に用いたのは511名となった（男子＝241名、女子＝270名）。平均年齢は16.85歳（SD=0.92）であった。

調査実施日

2010年12月に調査を実施した。

調査内容[i]

携帯メール依存尺度短縮版　吉田・高井・元吉・五十嵐(2005)により作成された携帯メール依存尺度の短縮版を使用した。この尺度は元の40項目版から３つの因子について因子負荷量の高い項目を５項目ずつ採用したものである。15項目について、「全くあてはまらない（1）」から「非常に当てはまる（5）」の５件法で尋ねた。吉田他（2005）の研究では因子分析の結果、「情動的な反応」、「過剰な利用」、「脱対人コミュニケーション」の３因子が得られている。また、Cronbachのα係数も十分な値を示しており、内的整合性に問題がないことが確認されている。

行動基準尺度　菅原他（2006）の作成した行動基準尺度を用いた。菅原他（2006）においては「地域的セケン」、「仲間的セケン」、「自分本位」、「他者配慮」、「公共利益」の５つの因子が得られており、Cronbachのα係数もおおむね満足のいく値が得られている。本研究では、「仲間的セケン」の下位尺度のみ使用した。そのため４項目について５段階尺度で尋ねた。

ネット統制尺度　内海(2010)により作成された尺度であり、15項目を５段階尺度で尋ねた。内海(2010)においては父親、母親と別に訪ねているが本調査では分けずに尋ねた。「統制実践認知」、「パソコンの使用の把握認知」、「接続自由認知」、「ケータイ電話使用の把握認知」の４つの因子が得られている。

親への愛着尺度　丹羽（2005）により作成された尺度であり、17項目を５段階尺度で尋ねた。「愛着不安」、「愛着回避」の２因子が得られている。Cronbachのα係数、再検査信頼性係数のどちらの検討においても本尺度に一定の信頼性があることが示されている。

友人に対する感情的側面尺度　榎本（1999）により作成された尺度であり、全５因子のうち「信頼・安定」因子、「不安・懸念因子」、および「葛藤」の３因子と関わる項目だけを使用した。「信頼・安定」因子、および「不安・懸念因子」は５項目のみ使用し、「葛藤」因子は４項目を使用した。そのため全14項目について６段階尺度で尋ねた。

デモグラフィック変数　性別、年齢、居住地域などを尋ねた。

結果

携帯電話の利用状況

本研究における調査対象の携帯電話によるインターネットの利用状況を概観するために、携帯電話によるインターネットの利用歴、および携帯電話によるインターネットの一日当たりの利用時間について度数分布でまとめ、結果を図で示したものがFigure１とFigure ２である。まず利用歴については若干女子の方が携帯電話を所有するのが早いことが見て取れる。男子は４年未満で半数を超えるが、女子は５年未満で半数を超えた。ただし、男女ともに、６年未満で80％近くとなるため、大半は中学生以降に所有するようになったと考えられる。

携帯電話によるインターネットの利用時間を見ると、こちらも若干女子の方が男子よりも利用時間が長い。どちらも半数以上は３時間未満であるが、４時間以上の割合が女子の方が男子よりも多くなっている。全体でみると70％程度は３時間未満の使用に収まっていた。

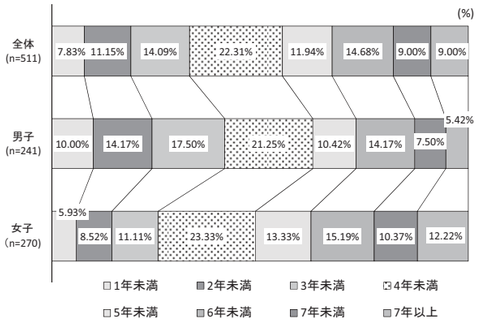


Figure1　本研究における高校生の携帯電話によるインターネット利用歴

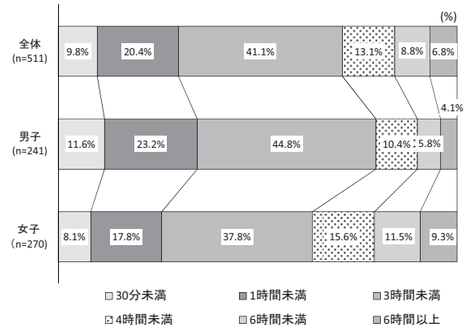


Figure２　本研究における高校生の１日あたりの携帯電話によるインターネット利用時間

尺度の検討

まず、各尺度の項目の分布を確認したが、問題となるような項目は見られなかったため、全項目を分析に使用した。

ネット統制尺度以外の尺度については、先行研究の結果にのっとり下位尺度ごとに得点化を行った。本研究においてネット統制尺度は、父親、母親に分けて尋ねていないという大きな変更点があるため改めて因子分析を行い、その後下位尺度の信頼性の検討も行った。まず、因子分析（主因子法）を行ったが、固有値の大きさと減衰状況、そして結果の解釈可能性の観点から３因子解が妥当と考え、プロマックス回転を行った。結果をTable１に示した。因子の解釈および得点化にあたっていは因子負荷量が.40以上の項目を採用した。第１、第３因子は内海（2010）において見られた結果と同様であるため、それぞれ「統制実践認知」、「接続自由認知」とした。第２因子は、パソコンやケータイによるインターネット使用を親が把握している認知であると解釈されるため、「インターネット使用把握認知」と命名した。この３つの因子についてCronbachのα係数を算出したところ、「統制実践認知」がα＝87、「インターネット使用把握認知」がα＝.84、そして「接続自由認知」がα＝75となり、内的一貫性の観点からは一定の信頼性があることが示された。そこで、親によるネット統制尺度については項目得点を合計し、３つの得点を算出した。

Table１　ネット統制尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3
ケータイ電話を使うときのマナーについて話している	*.77*	.03	.06
あなたがケータイ電話の使い方のルールを守らないと叱る	*.76*	.01	.01
インターネットの危険性に関し注意するようあなたに話している	*.75*	-.02	-.00
危険なケータイ電話のサイトには接続するなとあなたに話している	*.71*	-.08	.07
あなたがパソコンの使い方のルールを守らないと叱る	*.69*	.07	-.11
あなたのケータイ電話の使い方についてルールを決めている	*.60*	.10	-.13
パソコンであなたがどのようなインターネットのサイトを使っているか知っている	-.06	*.95*	-.01
あなたがパソコンでふだん何をしているか知っている	-.12	*.94*	.01
あなたが家でパソコンを使う時にはまわりにいることが多い	.06	*.47*	-.08
あなたがケータイ電話でふだん何をしているのか知っている	.33	*.45*	.06
ケータイ電話で誰とメールのやりとりをしているのか知っている	.24	*.45*	.08
好きなだけ長い時間ケータイ電話を使わせてくれる	.06	.07	*.75*
好きなだけ長い時間パソコンを使わせてくれる	.04	-.08	*.65*
ケータイ電話のどのようなサイトでも自由に接続させてくれる	-.07	.10	*.65*
パソコンのどのようなサイトでも自由に接続させてくれる	-.03	-.10	*.60*
因子間相関	—	.59	-.43
		—	-.23

注）F1＝「統制実践認知」，F2＝「インターネット使用把握認知」，F3＝「接続自由認知」

各変数の性差および携帯電話利用時間との関連

各変数の得点について男女別に平均値標準偏差を算出し、 Table 2 まとめた。 さらに、性差を検討するために各得点に対してt検定を行った Table 2）。携帯メール依存の過剰な利用、ネット統制尺度の接続自由認知、インターネット使用把握認知にいて有意な差が見られ、女子の方が男子よりも高い得点を示した。さらに親への愛着尺度の愛着回避、友人に対する感情的側面の葛藤についても有意な差が見られ、男子の方が女子よりも高い得点を示した。

次に携帯電話利用時間と携帯依存尺度、ネット統制尺度の各得点との関連を検討するために相関係数を算出した（Table 3）。携帯電話利用時間の分布には偏りが見られるため対数変換を行ってから相関係数を求めた。全体において携帯メール依存尺度の過剰な利用との間に相関がみられたが、親によるネット統制との関連はあまり高くなかった。男女別に見た場合、男子よりも女子の方に各変数との関連が高い傾向が見受けられた。

Table 2　各変数の男女別平均値、標準偏差、および性差

尺度名	下位因子	男子（n=241）	女子（n=270）	t　df=509
携帯メール依存尺度	脱対人コミュニケーション	11.33 (4.43)	11.62 (4.67)	0.73
	情動的な反応	13.39 (5.02)	13.98 (5.26)	1.31
	過剰な利用	12.76 (4.59)	13.99 (4.37)	3.12**
ネット統制尺度	統制実践認知	15.69 (5.7)	16.06 (6.19)	0.67
	接続自由認知	14.17 (4.07)	15.21 (3.86)	2.99**
	インターネット使用把握認知	11.66 (4.68)	12.68 (5.12)	2.34*
親への愛着尺度	愛着不安	20.41 (6.4)	20.14 (7.28)	0.44
	愛着回避	27.57 (5.91)	24.88 (6.8)	4.75***
行動基準尺度	仲間集団	11.35 (2.96)	10.84 (2.97)	1.93 †
友人に対する感情的側面尺度	信頼・安定	18.06 (5.36)	18.47 (5.41)	0.87
	不安・懸念	18.37 (5.3)	18.48 (5.85)	0.22
	葛藤	13.01 (3.69)	12.26 (3.84)	2.24*

†　p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

ble 3　携帯電話利用時間と携帯メール依存、親によるネット利用統制との関連

	1 日当たりの携帯電話利用時間		
	全体（n=511）	男子（n=241）	女子（n=270）
脱対人コミュニケーション	.14**	.08	.18**
情動的な反応	.15**	.04	.22***
過剰な利用	.32***	.25***	.34***
統制実践認知	-.13**	-.13*	-.14*
接続自由認知	.22***	.11	.28**
インターネット使用把握認知	-.03	-.03	-.06

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

携帯メール依存と対人的要因との関連

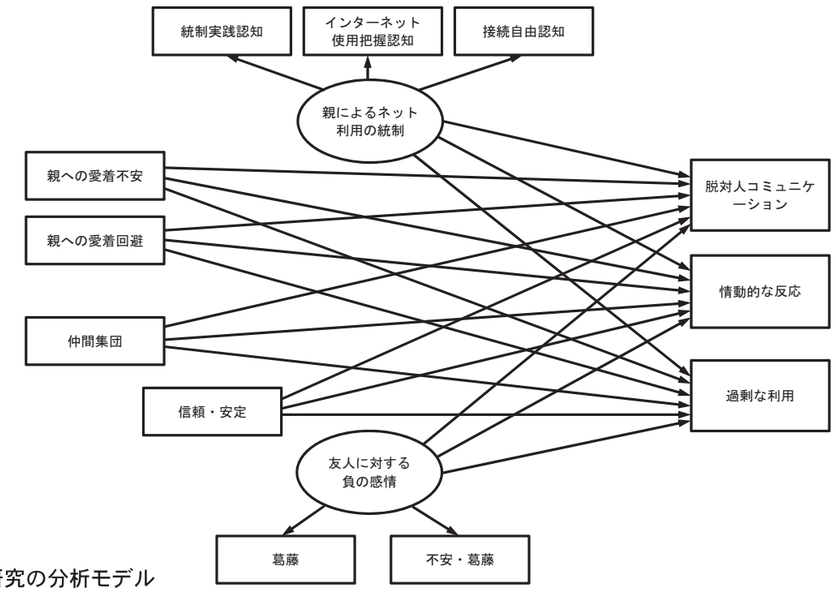
携帯メール依存と本研究で取り上げた対人的要因との関連を検討するために、まず変数間の相関係数を算出した。その際、性差を考慮し男女別に算出を行った（Table 4）。携帯メール依存の各下位得点との関連を見た場合、親に関する得点に関しては男女ともに高い関連はあまり見られていない。女子における愛着不安との間に弱い関連が見られた。友人に関する得点に関しては男女ともに弱いから中程度の相関が見られている。

上記の携帯メール依存と各変数についての関連をより深く検討するために、対人的要因を説明変数、携帯メール依存を目的変数とした、構造方程式モデリングによる分析を行った。観測変数を用いて分析を行ったが、適合度指標を考慮した上で潜在変数を取り入れ、最終的にFigure 3 のモデル

Table 4　変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 脱対面コミュニケーション	—	.71	.59	.07	.01	.07	.07	-.05	.19	.05	.20	.18
2 情動的な反応	.54	—	.59	-.04	.14	-.06	.11	-.08	.23	.02	.40	.20
3 過剰な利用	.46	.52	—	.03	.07	.06	-.00	-.03	.10	.08	.12	.08
4 統制実践認知	.01	.00	-.06	—	-.43	.62	.18	-.26	-.10	.19	.03	.12
5 接続自由認知	-.10	-.02	.02	-.51	—	-.31	-.04	.07	.13	.04	.24	.09
6 インターネット把握認知	-.02	-.08	-.02	.52	-.23	—	.24	-.33	-.02	.25	-.12	.04
7 愛着不安	.30	.23	.07	-.06	.05	-.11	—	-.02	.24	-.08	.27	.30
8 愛着回避	.08	-.03	.01	-.20	.10	-.34	.32	—	-.03	-.17	-.14	-.07
9 仲間集団	.35	.40	.17	.04	.01	-.04	.32	-.01	—	.12	.28	.22
10 信頼・安定	-.10	.02	.11	.18	.01	.25	-.16	-.13	-.03	—	.21	.16
11 不安・懸念	.30	.40	.11	-.04	.04	-.12	.53	.06	.48	-.22	—	.66
12 葛藤	.40	.32	.09	-.04	-.06	-.15	.41	.14	.42	-.33	.61	—

注）対角上段が男子，対角下段女子の相関係数を表している。



re 3　本研究の分析モデル

を採用した。ネット統制尺度の下位尺度得点は１つにまとめ、「親によるネット利用の統制」とし、友人に対する感情的側面尺度の葛藤と不安・懸念は１つにまとめ、「友人に対する負の感情」とした。全体で行った場合と男女別に分析した場合とで、GFI, AGFIに大きな差は見られなかったが、男女別の分析の方がRMSEAの値が良かったため、男女別の多母集団同時分析を最終的な結果とした。適合度指標はGFI=.96、AGFI=.86、CFI=.94、RMSEA=.06であった。

各変数から携帯メール依存へのパス係数と決定係数をまとめたものがTable 5である。友人に対する負の感情は携帯メール依存の脱対人コミュニケーションと情動的な反応に最も高い正の関連を示した。また、行動基準としての仲間集団も高くはないが脱対人コミュニケーション、情動的な反応に有意な正の関連を示した。過剰な利用とはほとんど有意な関連は見られなかったが、女子において友人に対する感情の信頼・安定が有意な正の関連を示した。親に関する変数である、親によるネット利用の統制、親への愛着は携帯メール依存のどの得点とも有意な関連を示さなかった。

考察

携帯メール依存と性差、携帯電話利用時間との関連について

携帯メール依存尺度および各変数について性差の検討を行った。携帯メール依存の下位尺度ごとの性差については、過剰な利用にのみ性差が見られ女子の方が男子よりも高い得点であった。これは西村・遠藤（2010）でも同様の結果であったが、吉田他（2005）においては全てにおいて女子の方が男子よりも有意に高い得点をとっていた。全体に本研究の調査対象の得点は吉田他（2005）よりも低い値を示しており、携帯メール依存の自己認知の程度は低いサンプルであるといえるかもしれない。ただし、携帯電話の利用時間自体は文部科学省（2009）や西村・遠藤（2009, 2010）と変わらぬ分布を示しており、活発に利用していることがうかがえる。また、女子の方が男子よりも１日当たりの携帯電話利用時間が長いが、携帯メール依存尺度の過剰な利用と同じ傾向を示している。さらに両者の相関係数を見ると、男子よりも女子の方が相関係数が高いことから、女子の方が携帯電話の利用が活発であり、その利用の多さを自覚していることを示していると考えられる。

Table 5　携帯メール依存と対人的要因との関連

		携帯メール依存					
		脱対人コミュニケーション		情動的な反応		過剰な利用	
尺度	変数	男子	女子	男子	女子	男子	女子
ネット統制	親によるネット利用の統制	.16†	.04	-.01	-.03	.09	-.09
親への愛着	愛着不安	-.07	.05	-.08	-.08	-.03	-.03
	愛着回避	.03	.04	.03	-.05	-.04	.01
行動基準	仲間集団	.17*	.16*	.14*	.15*	.09	.11
友人に対する感情	信頼・安定	-.06	.03	-.08	.17**	.02	.17*
	負の感情	.21**	.30*	.37***	.49***	.12	.14
	R^2	.08	.20	.18	.28	.03	.06

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

携帯メール依存と親に関する変数との関連

本研究では携帯メール依存との関連を探る対人的要因として、親によるネット統制、親への愛着、行動基準としての仲間集団、友人に対する感情的側面を取り上げた。各変数間の関連を単相関のレベルで見た場合、親に関する変数と友人に関する変数で関連の度合いに明確に差が見られた。親に関する変数の中で有意な相関を示したのは、男子では接続自由認知と情動的な反応の間に正の相関、女子では愛着不安と脱対人コミュニケーション、情動的な反応との間にどちらも正の相関が見られた。しかし、友人に関する変数に比べるといずれも低い相関係数を示しており、全体的に親に関する変数が携帯メール依存とあまり関連していなかった。

携帯メール依存と対人的要因との総合的な関連の検討を行うために男女別に構造方程式モデリングによる分析を行ったが、上記の点はより明確に表れた。親に関する変数で有意な関連を示したものは１つも見られなかった。本研究における予測は親による子のインターネット利用への統制や親との情緒的結びつきなどは若者のメディア利用と関連があることから、携帯メール依存とも関連を示すと予測したわけであるが、この予測は支持されなかった。インターネット依存との間には親との情緒的結びつき（Liu, et al, 2012）や親によるネット統制（Sun, et al., 2005）が負の関連にあることが示されていた。携帯メール依存ではこれらの先行研究のような関連が見られなかった。
この結果はインターネットを利用する際の接続するデバイスの性質による結果であるかもしれない。インターネット依存の場合、インターネットに接続するためのデバイスはPCや携帯電話など複数あるが、PCの場合は使用する場所が決まっていることも多いであろう。また、利用している状態が周りの人からも把握しやすい。一方で、携帯メールは携帯電話を利用するわけであるが、そのモバイル性により使用する場所が特定されない。すなわち松田（2008）の指摘するように、電話は「空間の克服」を、そして携帯電話は「場所の克服」、さらには「場所を通じた共有」からの解放を人間にもたらした。その結果、いつでもどこでも他者とコミュニケーションをとることができるようになった。そのため、家庭内でおいてさえ自分の部屋に限らず、多くの人目のない場所で利用することが可能である。つまり、親によるネット統制を行うにしてもPC利用に比べ、携帯電話の利用の方が統制する余地が小さいと考えられる。そのため、携帯メール依存について親によるネット統制はあまり関連が見られなかったのかもしれない。

ただし、本研究においても携帯電話の利用時間においては、統制実践認知が負の相関、接続自由認知正の相関を示していたこともあり、親のネット統制が高校生の携帯電話利用に全く関連を示していないわけではない。その点については、携帯メールの特性という点も考慮する必要があると思われる。携帯メールの利用相手という点を考えると、中学生以上では友人の割合がかなり多くなり親とのやり取りは相対的に少なくなる。親との愛着と携帯メール依存との関連に明確な関連が見られなかったのもこのためかもしれない。女子については愛着不安において関連が見られていたが、実際の携帯メールの相手ではないのであれば、親との情緒的結びつきは携帯メール依存に対しては遠因として作用するものであると考えられる。そのため、友人の要因も含めた場合にはその影響が見えなくなったのではないだろうか。

さらに、本研究の調査対象が高校生であったことも一つの要因であると考えられる。例えば、文部科学省（2009）では、家庭での携帯電話の利用についてのルールなどを調査しているが、小中学生に比べて高校生は「特にルールを決めていない」の割合が最も多く、その割合は小中学生と比較しても多いものであった。また、高校生においては守るべきルールが合うという認知が利用場面（食事時など）や利用時間帯との間にやや関連を示しているものの、携帯メールの利用数などとは関連が見られていない。さらに、家庭でのルールについては、子側の認識と親側の認識には大きなずれがあることも示されている（「特にルールを決めていない」の回答、親：26.2％、子（高校生）：54.0％）。これらの結果は高校生において親がネット利用の統制を行うことが実際に難しいということを示していると考えられる。そして、本研究で見られたような親によるネット統制と携帯電話の利用時間との関連、携帯メール依存との関連にお

いて示された違いとも整合している結果であると考えられる。ただし、先行研究との兼ね合いを考える際に、本研究では携帯メール依存の程度が低めであるということも考慮されなければならないであろう。携帯メール依存の度合いがより高い高校生には親によるネット統制がより強くかかわることも考えられるため、両者の関連については今後も検討が必要であると思われる。

親によるネット統制という点については、統制を行うことと把握することのどちらが有効であるかの議論もある。その点について本研究の結果はどちらも携帯メール依存とは関連が見られず判断できないが、携帯電話の利用時間との間の関連では、統制実践認知が負の相関、接続自由認知が正の相関を示した。この結果を踏まえると、親が統制を行うことの方が、子のメディア利用に影響があるとも考えられる。しかし Liau, Khoo, & Ang (2005) は青年の行うインターネット上での危険な活動に対して、親にネット上での危険因子について親が把握していることが負の効果を与えることを示している。また、内藤 (2009) では把握認知との間にも弱いながら関連が見られていることから、子のインターネット利用を把握することの有効性も示されているため、統制の実践と把握の両者の有効性については今後継続して検討する必要がある。

携帯メール依存と友人に関する変数との関連

携帯メール依存と友人に関する変数との間の関連では、予測通り友人に対する負の感情が脱対人コミュニケーションおよび情動的な反応と男女ともに有意な正の関連を示した。この結果は仁尾他 (2010) と同様であった。友人との関係において葛藤や不安を抱えることは携帯メールの利用時の情動的な反応をより大きなものにするとともに携帯メールの対人関係への影響力を大きく見積もるようになるというプロセスが存在ようである。「メールの返信などがないときに不安になる」といった感情は、若者も普段から少なからず感じているが（例えば、そのように回答する中学生は 22.4%（日本PTA全国協議会, 2012)、友人関係のありよう（特に負の感情）がその気持ちを増大させ、結果的に携帯電話を手放せなくなってしまうわけである。先述の通り、携帯メールでやり取りする相手が主に普段から関わりのある同じ学校の友人であればなおさらであろう。青年期において友人との関係で不安や葛藤を抱えることは当人にとって必ずしもマイナスとなるばかりではない。しかし、貧しい対人関係がインターネット依存と関連しているという結果もあるように（Milani et al., 2009)、継続してネガティブな感情を抱えることは、携帯メール依存というものにとってもそれを長引かせる結果となってしまうかもしれない。

行動基準としての仲間集団も携帯メール依存の脱対人コミュニケーションと情動的な反応との間に正の関連を示し、予測を支持する結果であった。興味深いのは単相関の段階においては、女子の方が男子よりも高い関連を示しており、また女子においては過剰な利用との間にも有意な正の相関が得られた。日本において、自分の社会的行動、振る舞いを決める際の基準として仲間集団を重視する傾向は女子の方が男子よりも強いと考えられるが、携帯メール依存との関わりにおいてもその影響の大きさが示されたと考えられる。仲間集団を行動基準として重視する理由にはいくつか考えられる。その中で、上野・上瀬・松井・福富 (1994) が青年対人関係のありようについて行った検討の中で抽出された「表面群」は携帯メール依存という文脈においても注目される。表面群は友人との心理的距離が遠い一方で、友人への同調性が強い群であり、集団でいることを心底重視しているわけではないが、集団から外れまいと群れ集まっているだけの傾向をもち、上野他 (1994) で「群れ志向」と呼ばれるような傾向をもった青年たちである。このような理由で仲間集団を重視し、それにより携帯メールの使用に依存してしまうことは、青年自身にとって大きな負の影響をもたらすと思われる。仲間集団を行動基準とする詳細な理由を分析し、携帯メール依存との関連を検討することは、青年の精神的健康への影響を考慮するうえで重要な視点になると考えられる。

その意味では、友人に対する感情的側面の中の信頼・安定が女子において情動的な反応と過剰な利用に正の関連が見られたことは興味深い。信頼・安定が高いことにより携帯メール利用における情動的反応が強まったり、過剰に利用してしまうことは、Igarashi et al. (2009) が指摘するような外向的携帯メール依存というプロセスに入るものであるかもしれない。外向性の高い人は社交的で仲間とコミュニケーションをする欲求が高いゆえに、携帯メールをそのための手段として過剰に利用するという流れが想定されているが、その相手が信頼・安定の高い友人であればより一層携帯メールが使われることは想像に難くない。信頼・安定という感情をもった友人関係は望ましいものであるが、それが携帯メールの過剰な利用へと結びつき、結果として不適応的な症状と結びつくのであれば、携帯メール依存という文脈においては注意が必要な要因である。

本研究の意義および限界と今後の課題

本研究は、携帯メール依存という若者の携帯電話利用において保護者が強い懸念を抱く事柄について利用者の対人関係の関わりについて検討を行った。その結果、友人との間に抱える負の感情や行動基準として仲間集団を重視することが携帯メール依存と正の関わることを示した。これらの結果は、Igarashi et al. (2009) において示された、外向的携帯メール依存、神経症的携帯メール依存というプロセスについて、一歩具体的な要素を取り上げ、その関連を示すことができた。その点において携帯メール依存という概念を理解するうえで価値のあるものであったと考えられる。

本研究における限界としては、調査対象の性質の問題が挙げられる。本研究の調査対象はインターネット調査会社のモニターであり、全体的にインターネットへの志向性が高い集団であることが想定される。そのため、より幅広い層を対象にした調査や反復して同じような知見が得られるかといった検討が求められる。また、携帯メール依存という概念をより詳細に理解する際には、かなり強くその症状を表す者を対象とした検討も必要になると思われる。

本研究においては携帯メール依存と親に関する要因の関連がほとんど見られなかった。先述の通り、本研究では高校生のみを対象としていたため、相対的に親の影響力が大きいと思われる小中学生を対象にした検討も必要である。また、高校生を対象にした場合でも親による統制の影響が大きい条件、小さい条件が存在するかもしれない。例えば、親自身のインターネット利用状況や態度といった要因が関連することも考えられる。Liu, Fang, Deng, & Zhang (2012) においては、親のインターネット利用行動と掲げるインターネット利用との規範が一致している場合には、親のインターネット利用の規範が青年の病理的なインターネット利用に負の効果があることを示している。このようなより有効性の高い親の関わりを探求することには価値があるであろう。

さらに、本研究の結果からは、携帯メール依存における過剰な利用と関連を示した変数がほとんど見られず、決定係数は携帯メール依存の他の変数に比べて低いものであった。過剰な利用は携帯メール依存からの心理的・行動的症状と強く関わっており (Igarashi et al., 2009)、その要因を探ることは重要なことである。外向性というパーソナリティ要因が強く関わることから、過剰な利用については他者との関わりについての動機や期待が関連することが予測される。本研究において示したように、他者をより限定して友人ととらえ、若者の友人関係のあり方、動機、期待が過剰な利用とどのように関連するのかという点を検討することで、過剰な利用につながる要因を特定することができるかもしれない。

また、近年においてはスマートフォンの普及やSNSの流行などから若者のインターネット利用状況は変化をしており、携帯メールの利用とSNSなどの利用状況を広くとらえることも必要であると思われる。現代の若者のメディア利用を理解するためにも、携帯メール依存についてより詳細に幅広い視点から検討することが今後も求められるだろう。

〈引用文献・参考文献〉

安藤美華代（2009). 中学生における「ネット上のいじめ」に関連する心理社会的要因の検討 学校保健研究, **51**, 77-89.

Billieux, J., Van der Linden, M., d'Acremont, M., Ceschi, G., & Zermatten, A. (2007). Does impulsivity relate to perceived dependence and actual use of the mobile phone? *Applied Cognitive Psychology*, **21**, 527-537.

榎本淳子（1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化 教育心理学研究, **47**, 180-190.

橋元良明・奥 律哉・長尾嘉英・庄野 徹（2010). ネオ・デジタルネイティブの誕生―日本独自の進化を遂げるネット世代― ダイヤモンド社

Igarashi, T., Takai, J., & Yoshida, T. (2005). Gender differences in social network development via mobile phone text messages: A longitudinal study. *Journal of Social and Personal Relationships*, **22**, 691-713.

Igarashi, T., Motoyoshi, T., Takai, J., & Yoshida, T. (2008). No mobile, no life: Self-perception and text-message dependency among Japanese high school students. *Computers in Human Behavior*, **24**, 2311-2324.

小林哲生・天野成昭・正高信男（2007). モバイル社会の現状と行方―利用実態にもとづく光と影― NTT出版

小林哲郎・池田謙一（2005). 携帯コミュニケーションがつなぐもの・引き離すもの 池田謙一（編） インターネット・コミュニティと日常世界 誠信書房 pp.67-84.

Liau, A. K., Khoo, A., & Ang, P. (2005). Factors influencing adolescents engagement in risky Internet behavior. *Cyberpsychology & Behavior*, **8**, 513-520.

Liu, Q., Fang, X., Deng, L., & Zhang, J. Parent-adolescent communication, parental Internet use and Internet-specific norms and pathological Internet use among Chinese adolescents. *Computers in Human Behavior*, **28**, 1269-1275.

松田美佐（2008). 電話の発展―ケータイ文化の展開 橋元良明（編著）メディア・コミュニケーション学 大修館書店, pp.11-28.

Milani L., Osualdella D., Di Blasio P. (2009). Quality of interpersonal relationships and problematic Internet use in adolescence. *Cyberpsychology & Behavior*, **12**, 681-684.

宮田加久子・ボーズ、J.・ウェルマン、B.・池田謙一（2006). モバイル化する日本人―パソコンとケータイからのインターネット利用が社会的ネットワークに及ぼす影響 松田美佐・岡部大輔・伊藤端子（編） ケータイのある風景 北大路書房, pp.99-120.

モバイル社会研究所（2009). 世界の子どもとケータイ・コミュニケーション ５ヵ国比較調査 NTT出版

NTTドコモ モバイル社会研究所（2010). ケータイ社会白書2011 中央経済社

文部科学省（2009).子どもの携帯電話等の利用に関する調査 <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/05/1266484.htm>（2009年10月6日）

Morahan-Martin, J., & Schumacher, P. (2003). Loneliness and social uses of the Internet. *Computers in Human Behavior*, **19**, 659-671.

日本PTA全国協議会（2012). 平成23年度マスメディアに関するアンケート調査 子どもとメディアに関する意識調査 調査結果報告書 <http://www.nippon-pta.or.jp/>（2012年6月2日）

仁尾友紀・石田弓・内海千種（2009). 大学生の携帯メール依存について：友人関係における不安との関連徳島大学総合科学部人間科学研究, **17**, 73-90.

西村洋一・遠藤健治（2009). 高校生のインターネット利用状況についての基礎的検討−対人不安傾向、性別を要因とした分析 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, **3**, 157-168.

西村洋一・遠藤健治（2010). 高校生の携帯メール依存に関わる心理的要因の検討―自己制御、疎外感を要因として―北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, **2**, 41-53.

丹羽智美（2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究, **13**, 156-169.

佐藤有耕（1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, **3**, 11-20.

菅原健介・永房典之・佐々木 淳・藤澤 文・薊 理津子（2006). 青少年の迷惑行為と羞恥心―公共場面における５つの行動基準との関連性― 聖心女子大学論叢, **107**, 180-160.

杉浦 健（2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係―その発達的変化― 教育心理学研究, **48**, 352-360.

Sun, P., Unger, J. B., Palmer, P. H., Gallaher, P., Chou, C. P., Baezconde-Garbanati, L., Sussman, S., & Johnson, C. A. (2005). Internet accessibility and usage among urban adolescents in Southern california: Implications for web-based health research. *CyberPsychology & Behavior*, **8**, 441-453.

竹内和雄・金山健一（2010). 中学生の携帯電話依存を規定する諸要因の検討―携帯電話依存がライフスタイル、ストレス反応に与える影響 函館大学論究, **41**, 29-43.

戸部秀之・竹内一夫・堀田美枝子（2010). 児童生徒のインターネット依存傾向とメンタルヘルス、心理・社会的問題性との関連 学校保健研究, **52**, 125-134.

上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護（1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21-28.

内海しょか（2010). 中学生のネットいじめ、いじめられ体験―親の統制に対する子供の認知、および関係性攻撃との関連― 教育心理学研究, **58**, 12-22.

Van den Eijnden, R. J. J. M., Spijkerman, R., Vermulst, A. A., Van Rooij, A. J., & Engels, R. C. M. E. (2010). Compulsive Internet Use Among Adolescents: Bidirectional Parent-Child Relationships. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **38**, 77-89.

Ybarra, M. L., & Mitchell, K. J. (2004). Youth engaging online harassment: associations with caregiver-children relationships, Internet use, and personal characteristics. *Journal of Adolescence*, **27**, 319-336.

Yellowlees, P. M., & Marks, S. (2007). Problematic Internet use or Internet addiction? *Computers in Human Behavior*, **23**, 1447-1453.

吉田俊和・高井次郎・元吉忠寛・五十嵐祐（2005). インターネット依存および携帯メール依存のメカニズムの検討―認知―行動モデルの観点から― 電気通信普及財団研究調査報告書, **20**, 176-184.

〈注〉

i 実際の調査では本論文で挙げた以外の質問項目も含まれていたが、ここでは報告を割愛する。